

人間と植物の関係学とはなにか

浅野房世

日本園芸療法学会理事長, 一般社団法人O・ERS研究所代表理事
e-mail : asanofusayo@gmail.com, asano@oers.jp

What the People-Plant Relationship Studies are

Fusayo ASANO

*Japanese Horticultural Therapy Association President
General incorporated association O・ERS research institute President*

Key words : animistic thought, healing garden, interdisciplinary studies, mission of Academia
アニミズム, 癒しの庭, 学際領域, アカデミアの使命

はじめに

2020年度人間・植物関係学会の学会賞を頂戴いたしました。まことに光栄に思います。コロナ禍の影響で受賞講演は取りやめになりましたが、予定していた話題の内容を特集記事として紹介します。

これを機に、本学会と筆者の関係を思い起こし、人と植物の多岐にわたる学際関係の難しさ、面白さ、筆者の空間に対する考え、今までの仕事、そして今後の人と植物の関係学の役割などについて記載してみました。

学会のこと

1. 学会設立経緯

学会賞受賞にあたり、まずは人間・植物関係学会がいつどのように始まったのかを記しておきたいと思います。設立の背景を知っている人は、筆者や松尾英輔名誉教授（九州大学）、高江洲義英前会長を除き、ずいぶん少なくなっていました。

設立準備が始まった1990年代末の世相は、バブル景気が終焉し阪神淡路大震災によって人々が疲弊した時期です。植物の癒しが注目され始めました。このころ筆者は九州大学の研究生として松尾氏の下で博士論文執筆中でした。研究室には、注目され始めた園芸療法に関する問い合わせが、ひっきりなしに入ります。「園芸をしたら元気になった、園芸療法のお蔭である」「高齢者と園芸をすると高齢者が元気になった。園芸療法

は素晴らしい」「私の元気は園芸療法のお蔭で幸せです」等々。

2. 園芸福祉と園芸療法

松尾研究室では、「このような内容は、園芸の効果であり園芸療法とは呼ばない。正しくは園芸福祉の一部である」、この共通のスタンスをもって質問に対応していました。ゼミでは、植物の人間に与える心理的・社会的効果とは何かについて何時間も議論しました。しかし松尾氏の下で学ぶわれわれでさえ、園芸の持つ力、植物の持つ力を、どのように社会に提示していけば良いかわからない状況でした。当時の農学は生産第一主義であり人間を主体とする社会学や心理学とは遠く距離をとった学問でした。

3. 学際領域を専門に扱う学会

このころ松尾氏はダイアン・レルフ名誉教授（バージニア州立工科大学）が1990年にはじめた人間・植物協議会（People-Plant Council 以下PPC）をしばしば取り上げ、日本でも「学際領域を主として扱う」学問があっても良いのではないかと話をしました。先に記載した園芸療法の混乱も続き、園芸療法と園芸福祉の違いを論じる場も必要でした。

このようなことから1999年に九州大学農学部で片隅で、「学際領域を担う学会を立ち上げよう」という機運が高まり準備室が開設されたのです。人間と植物に関わる学際領域として教育・建築・都市計画・林学・福祉・進化・心理・園芸療法・文化・薬学・精神医学・文芸・作業療法の13分野の第一人者を選び、発起人として依頼しました。この中には、アメリカ・イギリス・

2022年2月17日受付。

本稿は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により2020年度人間・植物関係学会 学会賞（大賞）の受賞講演を対面開催できなかったため、誌面にて受賞講演の内容を掲載したものである。

ドイツの研究者も含まれました。

4. 人間・植物関係学会誕生

発起人は誰一人として断ることなく、「必要な分野だから協力します」と快諾してもらえました。とくに、霊長類研究の第一人者であった故河合雅雄京都大学名誉教授には「これからの学問になくってはならない分野」と高く評価して頂きました。河合氏とダイアン・レルフ氏に基調講演を依頼し、2000年には人間・植物関係学会設立準備会発足記念シンポジウムを東京で開催しました。聴衆は集まるだろうかと松尾氏や筆者の心配をよそに、当日は200人近い来場者があり、準備会発足としてまずまずの滑り出しとなりました。そして翌年2001年に兵庫県三田市にある人と自然の博物館で、第一回の大会開催となりました。

2004年には懸案であった学会認定の園芸療法士が誕生し、園芸療法の質を高め保証するという学会の目的も達せられたことになりました。その後、園芸療法の論文や発表が著しく多くなり、他の分野とのバランスがとれなくなったことや、資格付与システムが出来上がったこと、などから2008年秋に、園芸療法領域は日本園芸療法学会として分離独立をしました。

5. 国際学会開催

本学会は設立発起時からダイアン・レルフ氏が立ちあげたPPCのような国際的な学会を目指していました。そのため2004年には兵庫県において「人間・植物関係学国際シンポジウム&園芸療法サミット」を開催しました。その後は国際会議を開催する機会がありませんでしたが毎年学会で基金を積み上げており2019年には、アメリカ・台湾から演者を招聘し、「植物と祈り」という新しいテーマで国際学会を開催することができました。これらは皆さんの記憶にも新しいのではないかと思います。このような経緯をへて20年が過ぎました。

筆者のこと

上記のような学会の成長と照応するように、筆者自身も人間と植物の関係を深く研究するようになりました。以下からは筆者の仕事や考えについて述べたいと思います。

1. 民間からアカデミアへ

筆者は民間企業（造園コンサルタント）でランドスケープを学び、人と自然を繋ぐ研究所（シンクタンク）を主宰し、その後に研究者になりました。アカデミアへの入職は兵庫県立大学（淡路景観園芸学校）教授に着任した2002年のことなので、一般企業を経験したうえでの遅いスタートとなりました。

一般企業やシンクタンク、アカデミアを経ながら、自分の仕事や研究が社会に貢献できているかを、常に自問自答していました。企業は利益を確保しなければなりません、社会貢献も必要です。残念ながらこの認識が少ない企業がほとんどです。

一方、研究者は研究を通して社会に利益をもたらします。その貢献経緯から再度反芻し、それをまた研究として社会に還元します。論文や本を手掛けるのは、研究の社会的効用を表示する1つの手法と思います。研究者は社会の近くにあるべき仕事です。しかし、この認識を持っている研究者は少ないことも事実です。

さて筆者の研究テーマはユニバーサルデザイン、ヒーリング・ランドスケープ、園芸療法空間のハードとソフトです。なぜこの研究に至ったかを考えてみると、自然への哲学的な思考にあったように思います。

2. アニミズムという考え

筆者は神道の家に生まれ育ちました。神道は山川草木に神が宿るアニミズムの思想です。教育環境は小学校から大学までキリスト教の影響下にありましたが、筆者の考え方の根本にアニミズムの思想があると感じています。もの心ついた頃から、木を切るときは御神酒をまき、大きな岩や山に手を合わせるといふ自然への畏敬が生活の中に取り込まれていました。

研究のためにアメリカやヨーロッパに何度も出かけましたが、一神教が浸透している欧米でも「自然への畏敬」は、日本と同じようにあります。仏教信仰の優勢なアジア諸国は言うまでもありません。

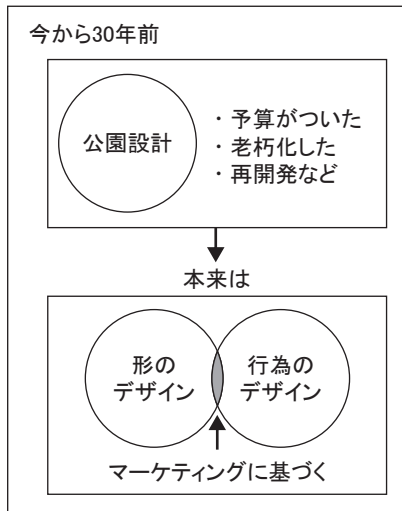
花や緑そして自然すべてに畏敬の念をもち、それによって生かされていると感じる事は、一神教や多神教という宗教の違いを超えるものです。それは人間がもつ自然への親和性であり、文化や宗教を超えたところにあるものだという信念をもつようになりました。

公的な場では宗教の話をするのが禁忌とされていますが、自然への畏敬は論じることができます。誰にとっても、自然についての個々の思いを語ることはたやすいはずですが、このようなことから人間と植物の関係学は社会の身近なところにあると感じるようになりました。

3. 誰のための仕事か？

筆者は経済学部経営学科で非常利組織のマネジメントを学び、卒業後に庭園デザインの仕事を始めました。

当時の庭の発注者は素封家か公園行政者でした。素封家は別として、公園の発注者は「〇〇の予算が付いたから公園整備を発注する」あるいは老朽による改修、区画整理事業などが整備理由でした。そこには公園のマーケティングやマネジメントは存在しません。「誰のために」「誰が使い」「どのような」公園が必要かの



第1図. 公園のデザイン方法.

調査が抜けており、使い手ではなく発注者の考えで公園が出来上がるという齟齬がありました(第1図)。

とはいえ施主に説教をするわけにはいきません。「発注者である行政と対等に話ができる地位を得たい」と考え、技術士の資格を取得することにしました。当時の技術士試験は難関で、司法試験の次に難しいとされていました。筆者が学生時代に学んだ分野とは違い土木、建築、都市計画のハードルは高く猛勉強の末3回目ですと合格しました。

ところが取得してみると、行政職にとって技術士は“対等”とみなす地位ではあっても、教えを請うべき識者という認識はありません。公園整備の在り方を変えるためには、博士号を取得して、その分野の第一人者になる以外の道はないと悟りました。40歳になる直前の決意です。一人娘は5歳になっていました。

4. 何を社会に問うか

筆者は大阪で開かれた花と緑の博覧会(1990年)の時から、弱者のための庭に興味をもち始めました。これはキリスト教教育を受け続けたことが一因かもしれません。

仕事で設計が始まった荒巻バラ公園は、少ない情報をもとに手さぐりながら車いすで一巡ができ、車いすから観賞しやすいレイズド・ベッドを整備しました。出来上がった公園をアメリカ人で車いす使用者のアクセス検査官(ADA法に基づき公共施設のアクセスのチェックを行う)が視察に訪れて「この公園にいる間、私が車いす障害者であることを忘れていた」と褒めてくれました。(第2, 3図)

1993年には、大阪府営公園のすべてのアクセスの実態調査を行いました。この調査では車いす使用者、視覚障害者、知的・精神障害者など600名以上の当事者および介護者にインタビューをして公園整備の在り方をマーケティングし、それを「こころのとびらを開け



第2図. 荒牧バラ公園 西側.



第3図. 荒牧バラ公園 レイズドベッド.

るために」という報告書にまとめました。通常の業務報告書は黒表紙の一冊を提出するだけですが、この報告書は100冊ほどを簡易製本し、公園整備にかかわる人に「すべての人が楽しむための庭とは何か」を記載して配りました。障害者は、特別な人ではなく皆と同じ空間で、花や緑に癒されたいと感じていることを訴えました。この冊子が建築出版社の鹿島出版会の目に留まり、『人にやさしい公園づくり：バリアフリーからユニバーサルデザインへ』という本になりました。この本は今も絶版にならず書店に並んでいることは、光栄なことです。

5. 園芸療法, 松尾氏, ダイアン氏との出会い

同じ頃、園芸療法を知りました。きっかけは澤田みどり氏が園芸新知識に記載した園芸療法の記事です。園芸療法の庭を学ぶためにシカゴ植物園やバターシーパーク(イギリス)を訪問しました。これらの結果、園芸療法は「庭の整備手法」ではなく、その庭を活用する「プログラム」であることを学びました。

園芸療法に関しては1994年に国際園芸学会議で来日していたアメリカのダイアン・レルフ氏、ジェーン・ストーンハム氏(イギリス造園家)そしてティム・スパージョン氏(イギリス園芸療法学会)を招聘し、国際シンポジウムを開催しました。この時に生涯の恩師となる松尾英輔氏とダイアン・レルフ氏に出会い、筆者が人間と植物の関係学を学ぶきっかけとなりました。

た。その後まもなくして九州大学の研究生になりました。

6. 社会変革のための博士論文

“社会変革のための近道は識者になること”と、考えて博士論文を松尾氏のいる九州大学でまとめはじめました。テーマは「死にゆく人のための癒しの風景」です。人間のもっとも大きなストレスは配偶者の死だといわれます。30年前は当事者への病気の告知は、ほとんどありませんでした。自分の死を予測しながら一人で死んで逝く人は、どのような風景を癒しとするか？ 伴侶を喪った人は？ 子どもを喪った人は？ これをアメリカ・フランス・イギリス・韓国で2000人のアンケート調査を行い、当事者へのインタビューとともに取りまとめました。

この調査の中で気づいたことがありました。悲嘆の真只中にある人は明るい風景を選ばないこと、選んだ風景によって悲嘆の状況が判断できること、風景を選択する行為は誰もが侵襲なく参加できることです。これらのことから、風景の癒し効果は宗教の癒しを凌ぐものであり、たとえ無神論者であっても自然を介在させることによって“生きるための癒し”を感じていることを確信しました。また癒しを促進するには人の支援が必要であること、それは悲しみに同化してしまう家族ではなく、第三者支援であることもわかりました。

これらの結果、ますます公共空間には癒しの庭が必要であるという信念をもつとともに、空間を創るだけでなく、その空間で癒しを提供するためには人の支援が必要であること、その育成が必須であるという考えに至りました。

7. あきらめない設計

「社会変革」とは、“言うは易く行うは難し”で多くの壁に阻まれました。1994年から筆者は人と植物のコミュニケーションを研究するコンサルタントの代表となり、大阪府営公園の中に日本で初めてのユニバーサルデザインのガーデンを計画しました。障害があっても五感のすべてに障害がある人は多くありません。五感を使う庭の鑑賞方法は、障害があっても残存機能を活用して楽しめます。これをコンセプトとしたセンサー・ガーデンです。

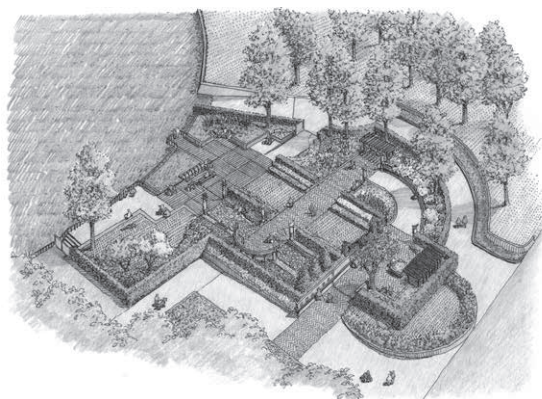
しかし、ユニバーサルデザインを知らない行政担当者たちは、「なぜ花壇を持ち上げるのか(レイズド・ベッド)」「なぜ池がテーブル状なのか(レイズド・ポンド)」「なぜ草花に触らせるのか、植物が傷むだろう」などなどのダメ出しの連続でした。普通の公園を造るより整備費も多くかかるからです。

行政担当者の質問に根気よく返答し(怒鳴りそうになるのを堪えながら)、障害者にも参加してもらい、行政担当者自身がユニバーサルデザインを理解できる

ようにワークショップを重ね、オープンに漕ぎつけました。この間、行政担当者は3人交替し、設計だけで4年かかりました。

これらの甲斐があって完成した2000㎡ほどの小さな空間は、多くの新聞や雑誌そしてテレビに取り上げられました(第4,5図)。アメリカやヨーロッパの雑誌にも掲載されました。筆者は、花と緑に関してはアメリカ・ヨーロッパが先進国だと思っていました。したがって花と緑の空間整備でも障害者対応は十分に実施されていると信じていました。しかし公園が完成するころから、花と緑のユニバーサルデザインの先進国はどこにもない。だから日本から花と緑のユニバーサルデザインの空間を造り、発信することが重要であると確信するようになりました。

完成までの努力を評価されたのか、空間そのものが評価されたのかはわかりませんが、この庭で日本造園学会賞(1999年度作品賞)を頂戴することができました。



第4図. ふれあいの庭 スケッチ.



第5図. ふれあいの庭 レイズドレイズ・ド・ポンド.

8. 空間の活用にはハードとソフトが必要

1995年の阪神淡路大震災の時、情報障害者といわれた視覚障害(歩道が陥没して歩けない)、聴覚障害(水や食料の配布放送が聞こえない)は人的支援がなければ生活ができませんでした。また震災で家族を喪い、

悲嘆による自死も多くありました。これらの問題に対応すべく、ボランティアが続々と現地で活躍しました。1995年がボランティア元年といわれるゆえんです。

さて、先に記載したようにユニバーサルデザインの公園は通常の整備よりコストがかかります。当時は公園に障害者が一人で出かける常識がまだない頃です。コストをかけて整備した空間であればあるほど、障害者や高齢者が利用できるのだろうかという疑問が出てきます。高齢者・障害者が公園を活用する文化を作ることが必要であろうと考えはじめました。

震災からまる2年の準備期間を経て、1997年1月17日に、ヒーリング・ガーデナー養成講座をスタートさせました（第6図）。花と緑の癒しを担うボランティアです。自宅や集合場所の駅まで当事者を迎えに行き、公園を楽しんでもらうための人材です。

当時のボランティアはすでに身に付けている能力を活用して社会貢献しますが、このボランティアは1回6時間の新しい知識を6か月間（2回／1か月）学びます。花と緑の癒し（車いす、視覚、聴覚、知的、認知症の公園案内方法、園芸療法等々）の講義は無料です。その代わりに、同じ時間数以上の社会貢献をボランティアとして提供してもらうことがルールです。このシステム（Payback system）はアメリカのマスター・ガーデナー（Master gardener）に倣いました。

この手法は日本で初めて「主催者側が提供したいサービスのために学びの機会を準備し、その学びを終了した者を人材として活用する」という、新しい制度となりました。こうして巣立ったヒーリング・ガーデナーは大阪府下で500人以上になり、今も存続しています。このシステムは、公園で障害者対応をする国営公園のガイド・ボランティアや国土交通省外郭団体が実施した公園での癒しの提供者グッドウِيل・ガーデナーにも発展し、全国で活躍していることは筆者の誇りです。



第6図. ヒーリング・ガーデナー養成講座実習風景.

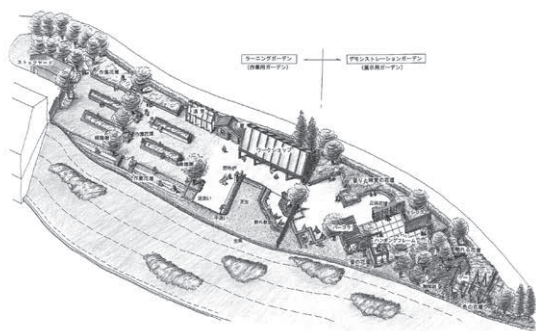
9. 園芸療法の教育について

先に記述しましたが1990年代は園芸療法に注目が集まった時代です。そして園芸療法と園芸福祉の境界も不明瞭な時代でした。2000年代は園芸療法の教育の時代でした。それ以前に園芸療法を学びたい人はアメリカかイギリスに行くしかありませんでした。しかし1999年にはIWAD環境福祉リハビリ専門学校（以下IWAD）を皮切りに、2002年には淡路景観園芸学校に園芸療法課程が開講され、その後は全国大学実務教育協会はじめ園芸療法の教育を提供する大学・短期大学が増加しました。筆者は開講された淡路景観園芸学校の教授に着任し、アカデミアキャリアのスタートを切りました。

淡路景観園芸学校は阪神淡路大震災の震源地近くにあります。景観園芸コースの建設が始まった直後に震災にあったのです。当時の知事は兵庫県に世界中から有形無形の支援をもらった返礼として、「花と緑が心を癒すことを科学として解明することが社会へのお礼の1つ」というコンセプトのもとに新たなコースとして急遽園芸療法課程設置がすすめられました。

本課程の修了生はアメリカ園芸療法協会（AHTA）の認定資格を取得できるように、AHTAと協定を結びました。キャンパスのガーデンも設計しました（第7、8図）。設置後20年が過ぎた現在も臨床指導を重視し、園芸の技能と同様に医学や福祉の知識を提供し、園芸療法士として医療・福祉分野で対応できる技術を提供しています。淡路景観園芸学校からは、優秀な園芸療法士が輩出され続けています。

2006年には東京農業大学農学部バイオセラピー学科に園芸療法学研究室が開設されました。一足早く人間・植物関係学研究のために着任していた松尾英輔氏とともに、筆者はそちらで教鞭を執ることになりました。学科開講時の受験者数は他学科に比べ群を抜いて多かったと聞いています。着任時には臨床実習のための庭がなかったために、公益財団法人都市緑化機構（現）のコンペに応募しました。「もったいないガーデン」という名称のもとユニバーサルデザインと環境共生をコンセプトとしました。思いがけず国土交通大臣



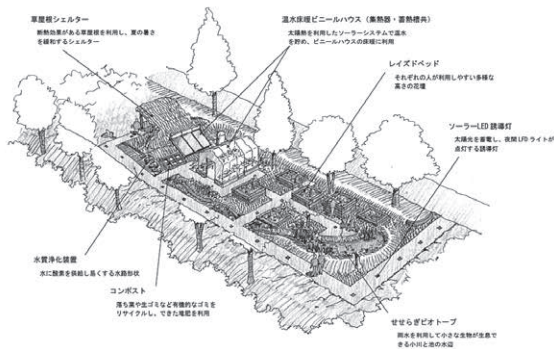
第7図. 淡路景観園芸学校園芸療法ガーデン・スケッチ.



第8図. 園芸療法ガーデン 触るコーナー.

賞を受賞し、財団の支援で実習ガーデンが実現しました(第9, 10図)。

さてこのような華やかなことが沢山あったにもかかわらず、2020年に近づく頃からIWADや東京農業大学は相次いで園芸療法教育から撤退する動きをはじめました。これは、園芸療法の国家資格化が難しく、医療・福祉分野の職業として確立する道が険しいと判断されたことも一因です。しかし園芸療法のニーズが減少しているわけではありません。園芸療法士の資格をもつ



第9図. 東京農業大学もったいないガーデン スケッチ.



第10図. もったいないガーデン 実習風景.

た作業療法士、ナース、理学療法士などは引っ張りだこであることから、国家資格取得者のダブルライセンスとしては魅力のある職能のようです。

筆者は園芸療法教育現場に20年以上関わってきて、園芸療法士の教育開始はいつが適切かと、いつも自問自答をしてきました。園芸療法は言語に依存せず、患者の植物への眼差しを中心に、患者の心理状況を判断し、プログラムを検討していきます。これは20歳前後の若者のもつ想像力を凌ぐ力量が必要です。東京農業大学でも学部を卒業し大学院で学ぶようになって初めて、患者の行動の機微に気づく学生が少なくありません。そのような経験から、園芸を療法として活用する臨床の開始は大学院以上もしくは社会人のリカレントがより実践的だと思うようになりました。

10. 病者を癒す空間整備

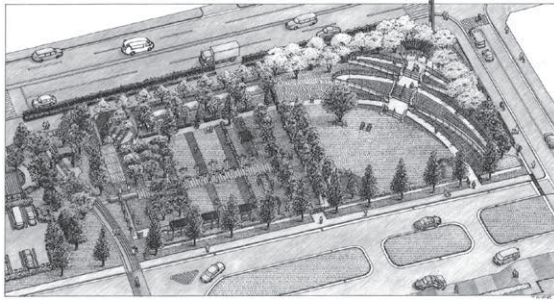
この30余年にはたくさんの仕事をしてきましたが、もっとも力を入れたのは先のセンサー・ガーデンと関西労災病院の庭、そして後ほど紹介する有料老人ホームの庭です。

博士論文でまとめた「喪った人、逝く人の自然に対する思い」を具現化する機会が欲しいと思っていました。センサー・ガーデンを整備した経験から、社会にないものを文化として定着させるためには、形として具現化することが重要であると思いました。新しい概念は、言葉の説明だけでは伝えきれないものです。具体的な空間を作り、その空間のもつ意味を説明することで、多くの人は概念を理解できるからです。

そのような時に、関西労災病院から連絡があり「患者のための癒しの庭」を造って欲しいと言われました。この頃にはアカデミアの経験を活かし空間デザイン分野では「識者」となっていましたので、意思決定者である院長に「私の好きなように設計させてほしい。絶対に院長に恥をかかせることはありません」と宣言し、さらにもう1つ「常駐の園芸療法士を配属する」ことを条件に仕事を引き受けました。思えばずいぶん強気で嫌味な発言だったと思います。

この庭で造りたかった空間は、知らず知らずのうちに「体を動かしたくなるリハビリテーションの庭」と「泣くことのできる庭」です。アフォーダンス(環境が動物に対して与える行為促進のことでアメリカの知覚心理学者ジェームズ・J・ギブソンの造語)の理論に従い、前者は室内の理学療法室より歩行訓練が促進できるような仕掛けを庭に造り、後者は、静かに心を癒せる空間を造りました(第11, 12図)。

さて、余談ですが当時の医療には死の学問はほとんどありませんでした。病院は死を隠蔽していたともいえます。ところが人は死を避けるために病院に行きます。死のストレス軽減の1つは泣くことです。したがって病院は涙にもっとも近い施設ですが、泣くことがで



第11図. 関西労災病院ホスピタルパーク スケッチ.



第12図. 関西労災病院ホスピタルパーク 歩行訓練の道.

きる場所がありません。一人になりたい時、絶望で泣きたい時、泣くことができるガーデンを創りたいと思いました。

一人になって、しみじみ泣くことができる空間には、低く覆う緑のパーゴラ、水が湧き水面に白い花が漂う空間、足元には白い小さな花、「静謐の庭」と呼ばれる空間を造りました。もちろん自殺防止の監視カメラを気づかれないように設置しました（第13図）。

これらの庭は、5大新聞社はもとより看護・医学雑誌、テレビからも取材があり、院長は論文取材よりも多かったと笑い、筆者も院長との約束が果たせました。この病院の開設以後は、多くの新設病院では庭が整備され、患者のために緑が提供されはじめました。ただ



第13図. 関西労災病院ホスピタルパーク 静謐の庭.

し関西労災病院のように園芸療法士が常駐し、緩和ケアの病室を訪問し、また遺された家族に庭の花で癒すところまではすすんでいません。

11. 患児を癒す遊び場

各国のターミナル・ケア施設の調査に行った時の事です。俳優の故ポール・ニューマンが設置した診療所付きキャンプ施設を見学しました。この施設の設置には以下のような、いきさつがあります。ある難病児の母親が、ニューマン氏に「私の子どもは、病があるために普通の子どものようにキャンプ経験はもちろん、屋外で遊んだこともない」という手紙を送りました。これを知ったニューマン氏は私財を投入して1988年に、米国コネチカット州に診療所付きの第1号キャンプ場を設立、The Hole in the Wall Gang Camp（第14図）と名付けました。これはニューマン氏の主演映画の代表作から冠された名前です。その後、この団体は財団となり世界に15か所の医療ケア付きキャンプ施設を造りました（Serious Fun Children's Network以下SF財団）。SF財団のミッションは、「病気とたたかう子どもたちと家族のために、難病を乗り越えて、喜び、自信、そして新しい世界の可能性を見出せる機会を無償で創る」ということです。

見学後、こんな施設が日本にも必要だと思い、聖路加病院の小児科ドクター、東海大学附属病院の小児外



第14図. SF財団第1号キャンプ場.

科ドクター、国土交通省担当官に話をしました。はじめは皆が夢の世界を語るに過ぎなかったのですが、途方もない夢の話は、10年の間に多くの人を巻き込みました。

10億円の寄付が集まり、北海道に16haの土地が得られて、2012年に一部オープンしました。2013年には公益財団となり2016年にはアジアで初めてのSF財団認定キャンプ場となりました。ある難病の子どもの母親の手紙は、アジアで初めての医療施設付きキャンプ場（そらぶちキッズキャンプ）へと夢が繋がりました（第15、16図）。

「社会に必要な事であれば夢は叶う」と思いますが、一人ではできないことが多く、どれだけたくさんの志を束ねるかが重要だと思います。

12. 回想が出来る庭

今の日本で対策が急務とされているのは、新型コロナ（COVID-19）対策と高齢者問題です。すでに日本は2020年には高齢者比率が28%を超え、そのうち半数以上が後期高齢者となりました。高齢者の5人に1人が認知症になるといわれています。認知症リハビリ



第15図. 財団法人そらぶちキッズキャンプ 敷地スケッチ.



第16図. そらぶちキッズキャンプ建物群.

テーションは高齢社会になくなくてはならないものです。その1つに回想法があります。筆者はここにも人と自然の関係が活用できると思いました。

通常回想法は、高齢者が慣れ親しんだと思われる玩具、写真などが用いられます。これは見た目、音、手触りなど、視覚・聴覚・触覚への刺激で記憶を想起させる手法です。しかし認知症高齢者が、昔の懐かしい環境に身を置くことは、視覚・聴覚・触覚の単一刺激を凌ぐ効果があります。そのような空間にすることが、より効果的な回想法に繋がると考えられます。

この環境は英語のenvironmentではなくフランス語のmilieuという言葉の方が適切です。milieuとは単に物理的環境空間という意味ではなく、そこにいる人の魂に働きかける環境という意味をもっています。「環境・間・触媒」などの意味にも使われます。オギュスタン・ベルクはmilieuを「風土」と訳しています。風景や匂いや音、そして空気によって、懐かしいという思いを想起させることができます。ただしその空間は、風土にあったものです。園芸療法士は、風土に合ったプログラムを提供することを教育されます。

このような研究をはじめていた頃に、セキュリティ会社のセコムから連絡がありました。横浜の高級住宅街に有料老人ホームを計画しているが、近隣住民の猛反対にあっている。反対を押しよける庭を作ってほしいとのことでした。幸いにして敷地が広く10000㎡の庭を整備することになりました。ここでも常駐の園芸療法士を配置することを条件として引き受けました。

テーマの違う7つの庭を作りました。入居者は自宅を処分して入居する人が少なくありません。自宅から持ってきた思い出の草花を育てることのできる「思い出の庭」、人恋しくなる夕暮れに香る花、ジャスミン（夜香木）、フウラン（風蘭）、ゲッカコウ（月下香）などを植栽した「黄昏の庭」、そして回想法に供する「里山」などです。里山には春にはフキノトウ（露の臺）が芽をだし、秋にはヒガンバナ（彼岸花）が咲きます。車いすでも田植えもできます。井戸があり、カキノキ（柿ノ木）があり、水車が回る里山風景です。

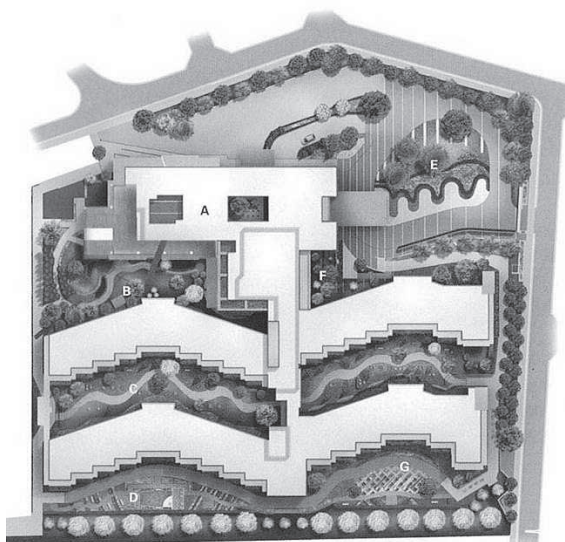
入居した時は5分も歩けなかった高齢者が、7つの庭を眺めながら歩くことで、いつしか40分以上歩ける

ようになりました。歩きたくなる庭があれば人は歩きはじめます。語りたくなる空間があれば人は語りはじめます。これもアフォーダンスです（第17, 18図）。

この施設は高額な入居金が必要ですが現在は満室で、常時100人以上の入居希望者がいると聞きました。園芸療法士が3人常駐しており、利用者の庭の散策に付き合います。園芸療法のセッションも定期的に行われますが、元気な高齢者が居室のベランダで花を育てる手伝いも行っています。花や緑に興味のなかった高齢者でもこの施設に入居することで、庭を歩き、花に癒され、花を育てる行為をはじめようのです。

13. 自然の癒しを療法に

1990年に開催された花と緑の博覧会が、筆者の研究の原点になりました。お祭りの賑やかさの陰に、一人ぼつんと佇む車いす高齢者の姿を見たことがきっかけ



第17図. コンフォート・ガーデンあざみ野 スケッチ.



第18図. コンフォート・ガーデンあざみ野 里山の庭.

です。障害があっても、花や緑を楽しめるのか？障害があっても花や緑は癒しているのか？視覚障害者が楽しめる庭、車いす使用者が楽しむ庭、知的障害者が安全に楽しめる庭、聴覚障害者に不都合のない庭、当時の日本にはこれらの情報は全くありませんでした。

その答えを探して進んだ30余年です。本文を記載するために作品と研究の年表を作ってみました。“花と緑がなぜ人を癒すのか”という答えを求めて日々、走っていたように思います（第1表）。

精神科医師中井久夫氏は、人間には自然への親和性があるといいます。彼が考案した風景構成法はその論理に裏付けされています。風景構成法は、川・山・畑・家など私たちを取り巻く風景のありようによって、対象者の精神的な問題を探る手法です。患者が落ち着きを取り戻すに従い、風景は明るくなり、人が存在し、畑に正常な緑色が戻ります。

中井氏の薫陶を受けた精神科医の高江洲義英氏に療法的視点の指導を請い、同氏の指導のお蔭で風景選択法を考案することが出来ました。またMilieu Therapyとして風景そのものが人間を癒し、療法として成り立つという考えをまとめることが出来たのも、この指導の賜物です。

松尾氏の指導による人間の猟る行為と育てる行為の二面性を踏まえることで、人の自然への関わり方の手法を知り、自然への癒しにたどり着いたと感じました。

14. 癒すことによって癒される

患者に教えられたことは数多くあります。臨床によって成長させてもらいました。大きな麦わら帽子の前に薄い布を自分で縫い付け、サングラスをつけ、誰とも会話をしない13歳の女兒は、ラッキョウ（辣蕒）、タマネギ（玉葱）、ダイコン（大根）など、土中に収穫物が存在する植物を言葉なく黙々と育てました。症状が軽減するにつれて育てるモノは花咲く植物に変化していきました。そしてやがて、病院の畑に来なくなり、園芸をする事すら忘れて、元気に退院して行きました。療法は終了の目的があつてこそ、はじまります。

被虐待の後遺症で歩行が困難となり人を信じない7歳の子どもがいました。どう関与しても、無関心を装うのですが、育てたアマリリスがある日開花したことから、心の扉が開きはじめました。絵には太陽や友だちも出現するようになりました。

これらは特別な事例ではありません。子どもだけではなく、成人からも、高齢者からも同じような“奇跡”を見せてもらいました。患者の状態を良くしようと悪戦苦闘しますが、やがて癒すことによって癒されている自分に気づきます。

第1表. 花と緑の仕事.

	ハードデザイン	ソフトデザイン
1990	花と緑の博覧会開催	弱者対応の公園調査を始める
1992	荒牧バラ公園 障害者対応設計	
1993	大阪府営公園バリアフリー調査	「心の扉を開けるために」執筆
1994	ハートフルパーク国際シンポジウム センサリー・ガーデンふれあいの庭設計	自然と人の「コミュニケーション研究所」設立
1995	阪神淡路大震災	
1996	大阪府営箕面公園昆虫館 視覚障害者展示設計	「人にやさしい公園づくり」上梓
1997		ヒーリング・ガーデナー・ボランティア教育スタート
1998	淡路景観園芸学校園芸療法ガーデン設計 障害児利用複合遊具デザイン (米子)	淡路景観園芸学校園芸療法課程カリキュラム検討 九州大学研究員
1999	人間・植物関係学会 設立準備	国営昭和記念公園センサリー・ガーデン設計 日本造園学会賞受賞 (ふれあいの庭) 国土交通省 公園ガイドライン策定 安らぎと緑の公園づくり (鹿島出版会) 上梓
2000	” 講演会	AHTA基調講演 AHTA教育賞受賞 ユニバーサルデザイン国際賞受賞
2001	” 設立	森のユニバーサルデザイン (林野庁) 上梓 ユニバーサルデザインハンドブック 上梓
2002	淡路景観園芸学校 園芸療法課程開講	淡路景観園芸学校に教授として着任 そらぶちキッズキャンプ誘致運動開始 九州大学にて博士号取得
2003	国営昭和記念公園 障害児複合遊具設計 関西労災病院 ホスピタルパーク設計	
2004	人間・植物関係学会 国際シンポジウム& 園芸療法サミット	国際学会事務局長として対応
2005	コンフォートガーデンあざみ野設計	園芸療法講座実施 (グッドウィル・ガーデナー講座)
2006	東京農業大学農学部 バイオセラピー学科 園芸療法学研究室開講	東京農業大学教授に着任 生きられる癒しの風景 (人文書院) 上梓
2007	老人ホーム星陽の庭(園芸療法) 設計	
2008	日本園芸療法学会設立	
2009		人間・植物関係学会会長就任
2010	東京農業大学もったいないガーデン設計	もったいないガーデン 国土交通大臣賞受賞
2011	アリスタージュ経堂「癒しの庭」設計	アリスタージュ経堂園芸療法支援
2012	そらぶちキッズキャンプオープン (総合監修)	人間・植物関係学会会長退任 日本園芸療法学会理事長就任
2017		一般社団法人O・ERS研究所主宰
2018	センサリー・ガーデン設計 (台湾)	
2019	人間・植物関係学会 日本園芸療法学会合同 国際シンポジウム	
2020	癒しの森 総合プロデュース(台湾)	人間・植物関係学会賞 受賞

人と植物の関係学

人間・植物関係学会は松尾氏の呼びかけで設立準備会が始まりました。人がより良く生きるためには、人間と植物の関係を考える場面が沢山あります。ダイアン・レルフ氏や松尾氏が“人間の幸福に重要な人と自然に関する学問は領域を超えて討議する必要がある”とした理由です。「学際領域が主役になる学会」として本学会が設立されました。

それから20余年が過ぎました。当時は予想もしなかった新型コロナのパンデミックが世界を襲い、人が人と繋がることを避けるようになりました。その反動か、人が植物と繋がることは増えました。種や苗や切り花の需要が以前と比較して増加しています。これは自宅にいる時間で花を生け、ベランダ園芸やガーデニングをする人が多くなったということです。

面会も外出も禁止された高齢者施設では、花一輪を眺めながら、塗り絵することが人気となりました。園芸療法士は高齢者がアジサイ（紫陽花）に語りながら色鉛筆を選択しているのを助けます。またマスク、ゴーグル、防護エプロンをつけて調理する状況であっても収穫した野菜を食べるのは施設の人気プログラムでした。

人間は植物によって、癒され、生きられる空間を獲得します。筆者のことを、学生は「緑教の教祖」と陰で呼んでいたようです。緑は万人に効きます。本学会

が多くの領域から、声高らかに人間と自然の関係を称え、謳う、学会であり続けてほしいと願っています。

受賞のご推薦をいただいた方はじめ、これまで筆者を支援していただいた多くの皆様に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

- 浅野房世・亀山 始・三宅祥介. 1996. 人にやさしい公園づくり：バリアフリーからユニバーサルデザインへ. 鹿島出版会.
- 浅野房世・三宅祥介. 1999. 安らぎと緑の公園づくり：ユニバーサルデザインとホスピタリティ. 鹿島出版界.
- 浅野房世・高江洲義英. 2006. 生きられる癒しの風景：園芸療法からミリューセラピーへ. 人文書院.
- ベルク, オギュスタン. 2005. 風土の日本. 筑摩学芸文庫.
- Miyake, Y. 2001. Universal Design Handbook MC Graw-Hill 2001.
- 中井久夫. 2015. 新版分裂病と人類. 東京大学出版会.
- 日本公園緑協会. 1999. みんなのための公園づくり：ユニバーサルデザイン手法による設計指針.
- 林業調査会. 2001. 森のユニバーサルデザイン：自然を生かす人を生かす.